

第3回 コロキアム

講演者：星 宏人 氏 (University of London, SOAS)

演 題：Theta-marking and Functional Categories

日 時：9月19日 (木) 13:00~17:00

場 所：神田外語大学 3号館 103教室

(星宏人氏のコロキアムについて)

このコロキアムは、二部構成で、第一部は星氏の研究に関わる講演、第二部は、事前に用意した、神田外語大学CLSゼミ等で出てきたSaito and Hoshi (1994, 2000)等の論文に対する質問やコメントについて星氏とディスカッションをする特別セッションとした。以下は、本コロキアムでの星氏の講演内容をまとめたものである。

(文責：CLS 山田昌史)

Hale & Keyser 1993やChomsky 1995などにおいては、意味役割付与は付与子 (theta-assigning head) の投射内でのみ構造的 (configurational) な方法でなされることが提案されているが、Saito & Hoshi (1994 /2000)では構造的な方法だけでなく、より柔軟な意味役割付与の可能性、つまり、意味役割付与子の統語的な移動先においても意味役割の付与がなされるとして、日本語の「VN-をする」構文などの現象を取り上げ、その妥当性を主張している。本講演では、こうしたSaito & Hoshi の分析をさらに発展させ、(i) 英語では構造的な意味役割付与しか許されないが、日本語では上記のようなより柔軟な付与が許されないが、それは、日本語には機能範疇として十全な機能を持つT範疇が存在しない(Kuroda 1988, Fukui 1995等)ことにより、言語間の違いは、Tの可変値 (parameter) の違いにより意味役割付与の方法が異なることと関わること、(ii) 日本語のように意味役割付与に柔軟性がある場合は、意味役割付与子が他の要素に統語的または語彙的に付加する時にも意味役割付与が可能であること、(iii) その付与はは意味役割の階層 (thematic hierarchy (Grimshaw 1990等)) に従って階層の低い役割から順になされることを提案した。この提案は、述語の名詞化接辞「方」への編入、使役構文、「が-の」交替現象などの考察により、経験的に支持されることが示された。